



イチャプリ

憧れの姫騎士さまとラブ修行
ICHA-PRINCESS

小説 神崎美宙

挿絵 皇月みすず

立ち読み版



登場人物紹介

Characters



レイチェル

サーハイランド王国の第五王女。自分よりも強い相手としか結婚したくないと宣言している。剣の腕が立ち、凛々しい姫騎士として通っているが、優しい一面も持っている。

新入りと言っていたが、なかなか見所があるじゃないか。

ミレイ

レイチェルのお世話をするメイド。ルーシアとは違った意味の大人っぽさを備えていて、テッドをレイチェルにふさわしい紳士に教育しようとしている。

テッド様を必ずや
一流の男にして差し上げます。



お姉さんが手取り足取り
教えてあ・げ・る♪



ルーシア

王国の将軍。妖艶な魅力を持つ大人っぽい女性で、テッドに剣の稽古をつけてくれる。時には、女性をリードできるようにエッチな訓練も。

テッド

サーハイランド王国の新米騎士。憧れていたレイチェルの側仕えとなることに。

序章	
第一章	褐色美女とエッチな修行
第二章	メイドの教え
第三章	急接近
第四章	憧れの姫騎士さまと
第五章	幸せな日々
第六章	やっぱり今日もイチチャラブ
終章	
	253
	216
	171
	137
	104
	056
	015
	007

「うふふ……正直におっしやってくださいませ……わたくしが一番だと……」

ルーシアとミレイは乳房をペニスに擦りつけるように両手で寄せ上げながら、期待のこもった視線を向けてくる。相手より劣っているなんて微塵も思っていないだろう。

しかし二人の乳房はそれぞれ感触が異なり、心地よさの種類も違うのでどちらが上かと優劣を決めるのはあまりに難しい。

「ですから……どちらにも、気持ちいいです……」

それに今は押し寄せる射精欲を必死に堪えているせいで、まともに思考は働かずそう答えるのが精一杯である。

ただそのどつちつかずの答えでは、性格は真逆なのにどちらにもプライドの高いお姉様たちが納得するはずもなかった。

「もう、それじゃあダメなのっ！　こうなったら、絶対に坊やの口からアタシが一番だつて言わせてあげるからね……」

メイドにライバル意識むき出しのルーシアはバストの根元ではなく先の方を持ち、硬く尖った乳首を敏感になつているペニスに押し当てて扱き始める。

少し汗ばみなめらかさを増した乳肌にコリコリとした新しい感触が加わり、あまりに気持ちよすぎて腰が震え射精欲を抑えきれなくなりそうだった。

「ルーシア將軍つたら、また乱暴な……ここはもつと優しく擦ってあげるべきです……」
ミレイは困つたように笑いながらルーシアとは反対に先ほどよりもゆっくりと乳房を動

かしてくる。柔らかい乳肉が絶妙の密着具合で摩擦を繰り返し、その弱火で炙るような快感のせいで逸物が蕩けてしまいそんな錯覚を覚えた。

「あ、くっ……そんな、無理ですっ！ どっちが一番かなんてっ……ああ、出る！ ふ、二人とも最高ですっ……」

限界寸前のペニスの側面をルーシアの褐色の爆乳が牛の乳を搾るかのように精液を搾り取るうと極上の乳圧で扱く。そしてその反対側からはミレイの雪のような巨乳が焦らすような快感を送り込んでくるのだ。

こんな状態でそうそう長く我慢できるはずもない。パイズリをされ始めてからそう時間は経っていないが、これでも性的経験の浅いテッドとしては堪えた方だった。

「ン、んっ……あん、どっちもなんて……納得いかないけど……はあん、このまま我慢させるのはかわいそうだからっ……坊やの好きな時に出していいわよ……」

「そうですよ、テッド様……どうぞ遠慮などせず、わたくしの胸に思いっきり射精してくださいませっ……ンンっ！」

競いあっていた美女たちも少年が限界なのを悟り、自己主張の激しかったパイズリから射精を促すように動きを合わせておっぱいで扱いてくれる。

おかげでバラバラだった四方から押しつけられる乳圧が綺麗に重なり、その幸せな圧迫感に耐えきれなくなって自ら腰を突き出していった。

「ああっ、ご、ごめんなさいっ！ 出るっ、あ、くあああっ!!」

それと同時に腰をビクビクと震わせながら、ずっと抑えつけていた尿道の奥から湧き上がる欲望を解放する。

ドビユウツ！ ドビユ、ドビユビユツ！ ドビユドブドプビユウウウウウウ！！

胸の谷間からわずかに顔を覗かせた亀頭から一気に白濁液が飛び散った。

「きゃん、すつごく熱うい……顔にまで、ンっ、かかっちゃう……」

「はあ……わたくしの胸の中でドクドクといってるのが分かります……」

ルーシアとミレイはよけもせずとうつとりとした表情を浮かべたまま、自分たちの胸の中で脈動する若いペニスを見つめている。

「くう、はあはあ……す、すみません……顔まで汚してしまつて……」

自分でも驚くほど長い射精がやっと終わった時には、乳房だけでなく美女たちの顔にまで精液の飛沫は飛び散っていた。

「別に謝らなくてもいいのよ……坊やがアタシのパイズリでいっぱい感じてくれた証拠なんだから……」

「そうですよ。わたくしのご奉仕に喜んでいただけただけで、嬉しいですよ……」

二人は付着した精液を拭うこともせず、先を競うように射精を終えてもなおいきり勃ち続けているペニスに舌を這わせる。

「はうっ……そんなに、舐められたら……ううっ……」

尿道に残っていた精液を吸い上げられ、表面の汚れを綺麗にするため肉感的な二枚の生

温かい軟体物が竿や亀頭を執拗になぞっていく。その度に腰が痺れるような刺激が股間に走り、思わず情けない声が漏れてしまう。

「ふふ、出したばっかりなのに、もうガチガチ……さすが若いだけあるわね……」

そんな少年を上目遣いに見つめながらルーシアはまたしても獲物を見つけた肉食動物のように爛々と瞳を輝かせゆつくりと上唇を舐める。その舌なめずりをするような仕草がとても色っぽくて、否応なしに胸が昂り興奮で全身の血液が沸き立つ。

「さすがテッド様……レッスンはこれからが本番ですものね……」

普段は優しく母性的なミレイも蕩けるような瞳で見つめてくる。しかもしつかりとペニスを握り先端を愛しげにしゃぶりながら、体勢を移動させヒップをこちらに向けてきた。

「あら、やるじゃない……でも坊やはアタシとエッチしたいでしょ？」

メイドの大胆な行動に一瞬驚いたような顔をしていたが、すぐに負けじと腰巻のマントをまくって豊満なヒップを顔に押しつけてくる。四つん這いになった美女たちは少年を誘うように桃尻を高くかかげて腰をくねらせていた。

（うう、すごい光景……二人ともエッチすぎる……）

色っぽい年上のお姉さんにペニスを舐められながら挿入をおねだりされて、年頃の少年が平常心を保っていられるはずもない。股間の逸物は一度射精したのに硬く膨張したまま、頭の中は色欲一色に染まり二人の魅惑的な身体から視線が外せない。

「ルーシア將軍ったら、ご自分がテッド様とセックスしたいだけではありませんか。さあ、

テッド様……わたくしと大人のお勉強をいたしましょう……」

「な、なによつ……そういうミレイだって気取ったこと言ってるけど、結局は坊やとエツチしたいだけでしょつ!?」

美女たちは互いに横目で視線に火花を散らせながら女將軍は腰巻を外し、メイドはスカートをめくつて肉感的な尻肌とショーツを露わにする。二人とも存在感のある大きなバストに目が行きがちだが、ヒップもかなり豊かだった。しかしその肉の付き方は乳房と同じくかなり違う。

女騎士として鍛え上げられたルーシアの引き締まった大きなヒップは二つの尻肉の左右が窪み、プリツとした上向きの綺麗な逆ハート型をしている。

反対にミレイの尻肉は豊満で桃のように瑞々しく、ぷるぷると揺れていて見るからに柔らかそうだった。

「あ、あの……本当にお二人ともすつごく綺麗で、色っぽくて……僕、もう我慢ができませんっ……」

全身の血液が沸き立ち興奮で高鳴る胸の鼓動を抑えきれなくなり、テッドは上半身を起こしてお姉様方の色っぽいヒップを食い入るように見つめる。

「ふふ、そうでしょう……? さあ、坊や……早くいらつしゃい……」

少年がその気になったのを感じたらしいルーシアは身体を捻り、手をヒップの方へと伸ばして下着のクロッチの部分の横にずらし、反対の手の人差し指と中指で淫ピラをくばあ

と開いてみせた。美女は小麦色の尻肌濃いピンク色の大淫唇にアヌスまで全てをさらけ出し、若い牡を挑発するように腰を揺らめかせる。

「まあ、テッド様つたら……そんなに見つめられたら恥ずかしいですわ……」

頬を赤らめそんなことを言っているミレイも、両手を下半身へと伸ばし純白のショーツを膝の辺りまで引き下ろして朝露に濡れた花卉のような女陰を露わにした。そして色みを帯びた視線で挿入をおねだりしてくる。

積極的な女將軍に、控えめながら上品に誘ってくるメイド。どちらにしても王国を代表するような美女たちにごままでされて、興奮をしない男などいないだろう。

「それじゃあ……い、いきます……」

ついに覚悟を決めたテッドは目の前で揺れる豊満なヒップに手を伸ばした。ルーシアとミレイのどちらから挿入するか悩んだが、選ばなかった時が恐そうだったので褐色の尻肉を掴み勃起ペニスを秘裂に向ける。

「ああん、やつぱりアタシよね？ ふふ、坊やもちゃんと分かっているわね……」

「もう……ルーシア將軍がそうやって脅かすからですよ……」

女將軍から得意げな笑みを向けられたメイドは呆れたように首を振っていた。女のプライドがぶつかりあっているようだったが、少年としては早くエッチがしたくてもうどうしようもなかったのだ。

逸^{はや}る気持ちを抑えられず、ギンギンに勃起した逸物の先端を膣口へと押し当てて腰を前

へと突き出していく。しかし焦って力加減を調整できず、一気に美女の膣内に根元までペニスをねじ込んでしまった。

……ズブツ、ズブツ！　ズリユウウウツ！！

「あはあつ！　あ、ああ〜んっ……ぼ、坊やったら、いきなり激しいのね……いいわよお、もつと奥まで突いてちょうだい……」

若いペニスで後ろから貫かれた瞬間にルーシアは長い紅髪を振り乱し、つんのめるようにして背中を仰げ反らせながら甘ったるい喘ぎ声を上げる。

女將軍の引き締まった膣内はキツく、ザラザラとした膣壁が絡みついてきて思わず精液を搾り取られそうになるほど気持ちいい。

「くうっ……ルーシア將軍、そんなに締めつけないで……も、もう少し緩めて……くださいっ……」

「んはあ……何を言ってるの、よ……ミレイより締まりがよくて気持ちいいでしょ？」

みっちり肉の詰まった女將軍の膣肉は侵入してきた男根を離すまいとばかりにギユツギユツと強烈に締めつけてきた。おかげで愛液で濡れた温かい膣壁とペニスの間にはわずかな隙間も存在せず完全に密着し、少し腰を動かすだけで激しく粘膜同士が擦れて甘い痺れが下半身に広がる。

「それではテッド様が自分で何もできないではないですか……テッド様、わたくしが優しく教えて差し上げますから、早くこちらへ……」

メイドは頬にかかる髪を耳にかけながら熱っぽい視線を向けてきた。そして大きなヒップを隣で快感に打ち震えている褐色の尻肉に押しつけ、自分にもと催促してくる。

「……は、はい、分かりました……」

「あ、ああんっ……抜けちゃうっ！ ちょっと坊やったら、もう抜いちゃうの？」

挿入しただけで気持ちよすぎて動けなくなっていたテッドは、天の助けとばかりに逸物を引き抜こうとした。しかし女將軍の膣壁は逃がさないわよとばかりに食いついてきて、快感慣れしていないペニスに淫粘膜と激しく擦れ思わず達してしまいそうになる。

「はうっ！　じゅ、順番に……挿入れさせていただきますから……」

不満げに口を尖らせ眉尻をツリ上げているルーシアをなだめながら、愛液で濡れたペニスの先端をミレイの膣口に押し当てた。

「あん♪　ああ、テッド様……やっとなんて挿入れてくださるんですね……どうぞ、好きなだけわたくしの中を味わってくださいませ……」

薄ピンク色の大淫唇に亀頭が触れただけで、嬉しそうに微笑む美人メイドは鼻にかかったような甘い吐息を上げる。がっしりと引き締まっていたルーシアの下半身とは違い、ミレイの腰まわりは女性らしい丸みを帯び、肌はモチモチとしていて手のひらが吸いつくように瑞々しい。

「あ、んっ……ゆっくりで、大丈夫ですから……そう、あ、あはあぁっ！」

肉づきのいい腰を両手で掴み、今度は焦らないように気持ちを落ち着けながらゆっくり

とペニスを美女の中へと沈めていく。母性的でふんわりとした雰囲気通り彼女の膣内は蕩けるように柔らかく、逸物全体を優しく包み込む。

(くう……ミレイさんの中も、気持ちよすぎるっ……)

ルーシアの膣のようにグイグイと締めつけてくるわけではないが、それでも温かくて蜜をたっぷり含んだ肉壁が緩すぎずキツすぎず絶妙の力加減で絡みついてくるせいですぐに股間に甘い感覚が広がっていく。

その快感が牡欲を刺激し、もつと感じたいと興奮は高まり自然と腰が動き出した。

「ん、んんっ……ああ、テッド様が入ってますっ……無理せずにテッド様のペースで腰を動かしてくださいませ……」

ミレイは少年を気遣い優しく声をかけてくれる。しかし軽く膣内をペニスで突かれただけで感じてしまったのか、美人メイドは甘い喘ぎ声を上げながら腰突きをねだるように豊かな尻尻を前後に揺らしてきた。細かい肉ヒダが亀頭やカリ裏にまでピタリと絡みつき、摩擦を繰り返す度に股間が蕩けそうなほどの肉悦が広がる。

「ううっ……これじゃ、またすぐ……出そうになってしまいます……」

ルーシアとミレイは身体つきも膣の具合も全然違うが、どちらも挿入ただけで射精しそうなほど心地いい。

優しく包み込むようなメイドの膣に夢中になっていると、女将軍が引き締まった褐色の尻肌をグイグイと押しつけてくる。

「ちよつと、坊やったらつ……どうしてミレイとばっかりするのよおっ……」

「はぁん、ん……テッド様は今わたくしと……あぁん、お、お勉強しているんですから、邪魔しないでくださいませ……」

王国を代表するような美女二人がむき出しになったヒップを高く振りかざし、自分とのセックスを待ちわびているのだ。

こんなに男心を熱くされることはない。もつと彼女たちとのセックスを楽しみたいと本能が訴えかけてくる。

「ル、ルーシア將軍にも……挿入れますから……」

一度射精したというのにもう全身を甘い快感に支配されていくが、それでも歯を食いしばって女將軍とメイドの膺へ交互に挿入していく。

「あぁん！ いいわよ、もつと奥に……坊やの好きに動いていいのよっ……」

「テッド様、わたくしにも……挿入れてくださいっ……」

バックからという男が一方的に責めることができる体位だが、どちらの美女も積極的に腰を揺らめかせ結合を激しくする。そのせいでセックスは始まったばかりだというのに射精欲は沸き立ち、無意識のうちに腰の動きが速くなっていく。

ズチャッ！ ズチャッ！ ズチャッ！ ズチャッ！

激しく淫肉と摩擦を繰り返せば快感は大きくなるが、その分だけ限界も近づいてくる。

「うう、もう……で、出そうになつてきましたっ！」

挿入しただけで十分すぎるほど気持ちよかった二人の膣内。そこに力任せにペニスをねじ込めば股間の奥から湧き上がる射精衝動はすぐに大きくなり、理性でどうにかできる状態ではなくなってくる。

そんな少年の様子を察したらしく美女たちの声も色めき出した。

「いいわよ、出したい時に……ンンっ、アタシの中に……出してえっ！」

「ああ、ンっ……最後はわたくしの中でお願いします、テッド様あつ……」

小麦色でムチムチのヒップと真っ白でプリプリのヒップが目の前で挿入をねだるような情熱的に揺らめく。王国最強と言われるあの女將軍も、優しくて上品なメイドも自分の精を欲して甘い声を上げて身体をくねらせているのだ。

（ほ、本当にもう我慢できないっ……う、うああああつ！）

肉悦的にも視覚的にも興奮はあつという間に最高潮に達し、もう本能のままに美女たちの膣肉に交互に挿入し腰を振り続ける。

その度に感觸の違う肉壁と淫摩擦を起こし、腰が蕩けるかと思うほどの快感に全身が支配されていく。

「あ、ああん！ いい、奥で擦れてるう……アタシの気持ちいいところに、坊やのペニスが当たってるのおっ!!」

ルーシアは自ら尻肉を揺らして挿入を激しくし、膣内は牡の精を搾り取ろうとするかのようさらさら締めつけがキツくなっていた。



「大丈夫です、僕に任せてください！」

この日のためにお姉様たちがセックスの手ほどきをしてくれたのだ。その教えを思い出しながらテッドは身体をレイチェルの下半身の方に移動させる。

「うん……わ、私は、その……経験がないから、テッドに全部任せるから……」

「ありがとうございます！ では、少し足を開いてください」

「……足を？ こ、こう……？ うう、この格好、恥ずかしいよお……」

王女は言われた通りに足具に包まれた両足を左右に開いてくれた。はらりとスカート状になっているドレスの間から生足が覗く。

無駄な脂肪の一切ついていない太股は、まるで野生動物のように引き締まっているのに肌は透き通るようにつるつるでスベスベとしていた。

「レイチェル様……足もすつごく綺麗ですね……」

「……そう？ 筋肉ばかりでゴツゴツしてて女の子らしくないし……自分ではそう思ったこと、ないけど……テッドはこんな足がいいの？」

思わず雪のように白い太股を撫でながら褒めると、これほどの美脚の持ち主なのに本人は無自覚だったらしく照れたように顔を伏せている。

「そんなことないですよ、レイチェル様の身体はどこもお綺麗で、完璧で……女神様みたくです！」

「も、もう、テッドったら大げさなんだから……でも、そんな風に言ってくれたのはテッ

ドが初めてだから嬉しい……」

愛しい女性の身体で美しくない部分などあるはずがない。少年はテッドは胸を高鳴らせながら騎士団の紋章の入った前垂れをめくり、股間とヒップを守っていた防具を外しかかる。

（ああ、ついにレイチエル様のアソコが……）

王女がはいていたのはブラジャーとお揃いで、こちらも細かい刺繍が入り上品にレースのフリルをあしらった可愛らしいピンクのショーツだった。先ほど言っていた通り、きつと普段はこんなものを身に着けていないのだろう。

凛々しい彼女とはあまりにギャップのあるこの女の子らしい下着を自分に抱かれるためにわざわざ選んでくれたのだ。その気遣いに自然と胸の奥が熱くなる。

「ぬ、脱がせますね……」

「うん、いいよ……」

その特別なショーツに手をかけると、頬を赤らめながらもレイチエルはコクンと首を縦に振ってくれた。しかしいざ脱がせようとすると緊張で手が震える。

ピンク色の小さな布切れが綺麗な太股からふくらはぎの方へと滑り、足首の位置までくると片足ずつ抜いてもらい、ついに姫騎士の女陰が露わになった。

「あ、ああ……は、恥ずかしいから、あんまりジロジロと見ないでね……」

憧れのお姫様の恥部は金色の薄い陰毛に彩られており、大淫唇は一本の筋のようにぴた

りと閉じている。ただ淡いピンク色をしたワレメはしつとりと濡れており、胸への愛撫で感じてくれていたようだ。

(こ、これが……レイチエル様のアソコなんだ……)

口の中が乾燥し思わず生唾を飲み込みながらその美しい淫裂に見とれていると、羞恥に耐えきれなくなったらしいレイチエルが弱々しく声を上げた。

すぐに膝を閉じようと足をモジモジとさせているが、少年の身体があつて結局は両脚を大胆に開いたままの格好になっている。

「す、すみません……でも、とつても綺麗で……もう我慢できませんっ……」

恥ずかしがつて真つ赤になっている姫騎士とは反対にテッドの興奮はもう最高潮に達していた。大急ぎでズボンごと下着を脱ぎ捨て、勃起したペニスを取り出す。

「あっ……」

腹部に先端がくつつきそうなほど反り返る逸物を目にしたレイチエルが目を見開き息を呑んでいるのが分かった。やはり男性器を見慣れてはいないようだ。

雲の上の存在のようだった姫騎士の初心な反応に男心はますます刺激され、湧き上がる欲望を抑えきれなくなる。

「い、いきますねっ……」

「うん、きてえ……」

レイチエルは意を決したように頷いた。手足はガチガチで緊張を隠せない様子のお姫様

を氣遣い、テッドは逸物の先端を大淫唇にそつと押しつけてからゆつくりと腰を前へと押し込んでいった。

ズブツ、ズリュツ、ズブズブツ……。

熱く濡れた膣粘膜粘と亀頭が密着した瞬間に、二人の体温が溶けあい一つになるような心地よさを覚える。しかし完全に閉じていた花弁を押し広げて大きく膨らんだ亀頭が膣の中へと沈んでいくと、狭い膣内の抵抗は強くペニスを食いちぎらばかりに締めつけてきて強烈な刺激が股間を襲う。

「あつ……はああつ、くつ……ううつ……」

レイチェルの表情はいつそう険しくなり、声にならない悲鳴を上げている。どう見ても痛いと呼んでいるのに、ギユツと目を閉じて少年の両腕を掴んで決してその言葉を口にしようとはしない。

ブチッ——熱い膣肉に逸物が包み込まれて快感に腰を震わせながら奥へと進んでいるうちに、薄い膜を突き破るような感覚が下半身を襲う。

その瞬間に王女の身体は大きく仰け反り、破瓜の痛みに打ち震えていた。

「ひいあつ！ あ、つつ……テッドが、私の中に……挿入してくるのが分かる……」

結合部に目をやると、純潔の証がツツつと流れ落ちる。憧れのお姫様の初めての男にされたという喜びと、彼女に痛い思いをさせてしまった罪悪感で胸はいっぱいだつた。

嬉しいのに申し訳ない複雑な感情が渦巻きながらも、ペニスをギユツギユツと小刻みに

締めつけてくる快感に反応して興奮はさらに高まる。

「痛くない……わけないですよね……大丈夫ですか？」

優しくしたつもりだったが何せ処女とセックスをするのは初めてなので要領が分からない。無理をさせてしまっているのではないかと心配になって王女の顔を覗き込んだ。

切れ長の眉尻が力なく下がり苦悶の表情を浮かべていたレイチェルだったが、少年の視線に気づくとすぐに笑顔を浮かべる。

「だ、大丈夫……想像していたのと、少し違って……驚いただけ……テッドと一つになれて、私も嬉しい……」

「でも……痛い、ですよね……？」

そうは言いながらも姫騎士の表情はどこか引きつり、気を使っているのか明らかに無理をして強がっていた。中途半端に挿入した状態で動かないのは生殺しのようでツラかったが、レイチェルのことを思うとこれ以上は動けない。

そんな少年の心内を察したのか、お姫様は途切れ途切れになりながらも言葉を続けた。

「いいの、つ、続けて……痛い、けど……私の中にテッドが挿入ってるのを感じられて、とても幸せなの……」

王女は照れたように頬を染めながら、そつと手を伸ばして少年の頬に触れて愛しげに撫でる。柔らかい手のひらの感触は心地よくて、潤んだ瞳で見つめられたことでさらに胸のドキドキが大きくなった。

「テッドは……気持ちいい？ 私とセックスできて、嬉しい……？」

「も、もちろんです！ 僕、とっても嬉しいですっ!!」

「ふふ、よかった……好きよ、テッドお……いっぱい可愛がってね……」

憧れの姫騎士からそんな風に想われているなんて想像もしていなかったので、彼女の告白は飛び上がりそうなくらい嬉しくなる。

（ううっ！ レイチエル様、可愛すぎる!!）

舞い上がった少年は感情を抑えきれなくなり、憧れのお姫様の手を握り返して腰を振り始めた。その反動で金色の髪が揺れ、レイチエルは甘い声を上げる。

「……はあ、あぁん！ い、いきなり激しいっ……す、少し優しくお願い……」

「す、すみませんっ……これくらいでどうですか？」

「あぁ、あぁん……うん、これくらいなら……大丈夫……」

慌てて腰の動きをゆっくりとすると、姫騎士は腕を握り締めたままエメラルドのような瞳を細めた。その表情は挿入したばかりの頃よりかはどこか陰しさも薄れ、柔らかくなっているような気がする。

「くうっ……レイチエル様の中、とっても気持ちいいですっ……」

ルーシアやミレイは意図的に膣でペニスを締めつけていたりして少年の快感をコントロールしていた感じだった。

しかしレイチエルの処女肉の中は非常に狭く、問答無用で逸物にしゃぶりついてくるせ

いで少し気を緩めるとそのまま搾り取られてしまいそうなほど刺激が強い。

「そう、なのか……んっ、ンンっ……テッドが気持ちいいなら私も嬉しい……」

微笑む王女の膣内は肉ヒダは少なめでツルツルとしている。膣圧は強いが大量の愛液で膣壁は濡れているので突っかかるような感覚はなく、むしろ吸い込まれるように腰が自然と動いてしまう。

ただそうすると激しく粘膜が擦れて、下半身が蕩けてしまうかと思うほど甘美な痺れが広がりに一気に射精欲が高まる。

（僕、レイチエル様とセックスしてるんだっ……）

相手は処女なのだから優しくリードしなければとか考える余裕があったのは始めのうちだけ。感動で胸が打ち震え、理性などどつくに吹き飛んでいた。

もつとレイチエルを味わいたい。

もつとレイチエルと深く繋がりたい。

もつとレイチエルに自分を感じてもらいたい。

そう考えているうちに自然と腰の動きは大きくなっていく。

「ンはあ、あぁっ……激しいっ、お、奥で擦れて……ひいあぁっ！」

肉勃起で膣奥を突かれる度に姫騎士の華奢な身体が仰け反り、普段耳にしたことのないような甘い声が口から溢れた。さらにむき出しになった形のいい美乳がリズムカルに揺れて男の視線を楽しませ、さらなる興奮を煽る。

ズッチュ！ ズッチャツ！ ズチュ、ズチュ、ズチャツ！！

「テ、テッドっ、待ってえっ……そ、そんなに激しくされたら……私、変になっちゃいそうなのっ……ああん、ああんっ！」

自分勝手に盛り上がり腰突きは乱暴になってしまいが、それに気づいてもレイチェルの膣の感触が気持ちよすぎて自制できない。

「す、すみませんっ！ でも腰が止まらないんですっ！！」

「はあん！ あんっ……私の中がテッドで満たされてるう……」

子宮口に亀頭を押しつけるとキュンキュンと膣が締めつけてくる。腰を打ちつけると左右に大きく押し広げられた両足がゆらゆらと揺れ、言葉になっていない喘ぎ声はさらに大きくなった。

「うう、はあんっ……テッド、テッドお……私も、何だか……あんっ！ き、気持ちよくなってきた、かもしれない……」

必死に手のひらをたぐり寄せ指を絡めながら王女は何度も少年の名前を呼ぶ。こんな一方的な腰使いなのに、レイチェルも感じてくれいるようだ。

「ほ、本当ですか!? 嬉しいですっ、もつと一緒に気持ちよくなりましょうっ……」

「ああ、一緒にっ……ンンっ、わ、私も……テッドと一緒に感じたい……」

とろんと蕩けた宝石のような瞳がキスを催促している。顔を近づけると姫騎士の方から金髪を揺らして頭を持ち上げ唇を押しつけてきた。しかも舌を差し出すと当然のように唾

液で濡れた舌を絡ませ恋人の接吻を受け入れてくれる。

「はむっ……ちゅ、ちゅうっ……ずっほ、こうひたかつふぁ……ンちゅっ……」

驚くほど積極的にキスをしながらレイチエルは甘い声を漏らす。こうやって手を繋いでキスをしながらセックスをしていると、身体だけでなく心まで一つになっているような感覚すら覚えた。

ずっとこうしていたかったが、あまりに快感が強すぎて股間の奥から熱い欲望が込み上げてくる。

「う、あぁっ！ レイチエル様、もう我慢が……」

「はぁ、あんっ……な、何……どうしたのテッドお……」

絶頂が近いことを訴えると、姫騎士は甘い声で喘ぎながら焦点の定まっていない瞳でこちらを見つめてくる。感じすぎていて少年の言葉すら耳に入っていないかったようだ。

「気持ちよすぎて、もう出そうですっ……」

「……ん、はぁ……う、うん、いいよ……テッドが好きな時に……出してえ……私の中に、いっぱいいっぱい出してえ……」

説明をしながらレイチエルは喘ぎ声を上げながら微笑む。そんな目尻が下がり快感に蕩けた顔をしている王女のおねだりに少年は驚きの声を上げた。

「ええっ、中に……いいですか……？」

「あん、ああんっ……もちろん、いいよお……」



耳まで顔を真っ赤にした姫騎士は二人に対抗するように、テッドの唇に自分の唇を押しつけた。その大胆な行動にキスをされた本人だけでなく、ルーシアとミレイも驚いたように目を丸くしている。

しかしすぐにそれなら話は早いとばかりに、お姉様たちはしなを作って妖しく微笑む。

「それじゃあ、みんなと一緒にエッチしちやいましょう♪」

「ふふ……こんな外でするなんて、ドキドキしてしまいます……」

「だ、だから……テッドは私とエッチするの……」

追っ手がやってくる心配はなさそうでも、いつ誰に見られるか分からない。焦る少年とは反対に恋人たちはもう完全にその気になっている。

正直言えばやっと会えたレイチェルと今すぐにでもエッチしたい。それに先ほどから両腕に押しつけられている大きなおっぱいが気になって仕方ないが、さすがに外でするとなると戸惑ってしまう。

「大丈夫、誰も来ないって……それにね、その草むらの陰になって、すぐには見つからないから……いいでしょう、坊や……」

「テッド様、お願いでございます……もう、わたくし我慢できません……」

あわあわ言っているうちにテッドは美女たちに地面へと押し倒されてしまった。

そしてズボンごと下着をズリ下ろされ、青空の下に元気にいきり勃つペニスを晒してしまふ。さわやかな風が逸物を撫で、ゾクリと背筋が震えた。

「あらあら……テッド様ったら、もうこんなに元気いっぱい……すぐに気持ちよくして差し上げますね……」

「ほくら、姫様も突っ立ってないで、一緒に坊やを気持ちよくしてあげましょうよ」

ルーシアとミレイは早速股間に顔を埋め、うっとりとした表情を浮かべながら左右から逸物を扱いてくる。頼もしいお姉様ではなく完全に発情した牝の貌だ。

「もうっ、テッドったら……わ、私というものがありません……そうやってすぐルーシアたちにデレデレしてえっ……」

「こ、これは……うう、すみません……」

当然のように嫉妬深いレイチェルが黙って見ているわけもない。

今すぐにも割って入りたそうな顔をしているが、やはり野外ということでは抵抗があるらしくモジモジとしながら辺りに人影がないか何度も確認している。それでも結局は少年を取られたくないという気持ちが勝つたらしくゆっくりと近づいてくる。

「外だというのに、こんなに大きくして……しょうがないんだから……」

王女は恥ずかしそうに頬を赤くしているが、美女たちの手の中でヒクついている逸物をジッと見つめたまま股間に腰を下ろした。

「姫様はもう坊やにフェラやパイズリはしてあげたんですか？」

「ふえ、ふえら……はい……なんだって？」

「お口や乳房でご奉仕することですよ」

聞きなれない言葉にレイチエルが首を傾げていると、ミレイが優しく微笑みながら説明をする。

「そうそう♪ それで坊やは特におっぱいで扱くパイズリをしてあげると、とっても喜んでですよ」

「パ、パイズリか……なるほど……確かにテッドは胸が大好きだから……私がお風呂で胸を使って身体を洗ってあげたら喜んでくれたし……」

テッドがおっぱい大好きなのは姫騎士もよく知っているので、納得したように頷いている。もちろん間違つてはいないのだが、そうやって改めて指摘されると恥ずかしい。

「まあ、姫様つたら大胆。でも、おっぱいならアタシが一番でしょ？ ほら、坊やの大好きなルーシアお姉様の大きなおっぱいで気持ちよくしてあげるわよ」

女将軍はビキニ鎧の胸当てをずらして自慢の爆乳を取り出し、見せつけるように両手で抱えて寄せ上げる。ただでさえ三人の中で一番大きなサイズを誇る褐色バストの谷間がさらに深くなり、その迫力にテッドは思わず視線を奪われた。

「あらあら……胸でしたらわたくしも負けていないと思いますよ……」

恋敵の挑発を笑顔で受け流しつつ、ミレイもメイド服の胸元をはだけていく。ブラジャーからまろび出てきたルーシアに負けず劣らずの巨乳は雪のように真っ白で、ぷるんぷるんと音が聞こえてきそうなほど弾み、見ているだけでもその柔らかさが伝わってくる。

（う、うわぁ……相変わらずすごい迫力……それにエロすぎる……）

色っぽい褐色乳と美しい白肌乳が並び、その対比で互いの乳房の魅力がさらに増しているような気がした。完全にお姉様たちのおっぱいに夢中になっていると、そのことに気づいたらしい姫騎士が眉尻をツリ上げて可愛く睨んでくる。

「またすぐそうやってえ……うう、私だって……一生懸命頑張るから……」

恥ずかしそうに視線を逸らしながらも、レイチェルは美女たちに対抗するようにドレスの胸元に手を差し込み、ゆっくりと引き下ろして生おっぱいを見せてくれた。

サイズでは二人には及ばずとも十分に豊かな乳房は美しい造形を誇り、小さめの乳輪と乳首の色形まで非常にバランスの取れた魅力的なバストである。

以前にルーシアとミレイが一緒にパイズリをしてくれたことはあったが、今はそこにレイチェルまで加わり三人同時に六つのバストが目の前に並んでいるのだ。その迫力に胸はドキドキと高鳴ってくる。

しかも部屋の中ではなく、いつ誰に見られるか分からない大自然の中で乳房を晒しているという非日常的な光景に新しい興奮を感じていた。

「ふふ、そんなに真剣に見つめちゃって……すぐに気持ちよしくしてあげるわね……」

紅髪の美女はいかにも重そうな爆乳を持ち上げ、すでにギンギンに勃起しているペニスに押しつける。張りのある乳肌の感触や質感たつぷりの弾力はもちろん、外気に晒されていた逸物を包むおっぱいから伝わってくる温かい彼女の体温がとても心地いい。

「はう……ルーシア將軍のおっぱい、とても気持ちいいです……」

腰が蕩けそうなほどの快感を感じて思わず情けない声が口から漏れる。そんな少年の反応を見たミレイとレイチェルも負けじと自分の乳房を逸物に擦りつけてきた。

「テッド様、わたくしの胸の感触はいかがでしょうか……？」

「もう、テッド！ ちゃんと私を見てつてば……私だって、おっぱいで気持ちよくしてあげるから……」

むにゅん！ ふにゅ、むにゅつ！ ふにゅつ、むにゅむにゅうううううううううう！！

彼女たちは少しでも自分の乳房とペニスの密着面を増やそうと、胸を反らして乳房同士をぶつけあう。綺麗な形をしていたおっぱいが押し潰されて、淫らに形を変えながら股間の上で躍っている。

「ううっ！ も、もちろんレイチェル様のおっぱいだって、ミレイさんのおっぱいだって最高に気持ちいいですっ……」

パイズリは一人にされるだけでもかなり気持ちいいのに、今は大好きな美女たち三人分のおっぱいがペニスを包み込んでいるのだ。もうそれだけで射精してしまいそうなほど気持ちがいい。

「まあ、ありがとうございます……もつとご奉仕させていただきますね……」

「ちよつと、坊やっ……おっぱいならアタシが一番でしょっ……」

自慢の乳房を褒められ嬉しくなったのか、ルーシアとミレイはもつと少年を喜ばせようと押しつけるだけでなくそのまま上下に揺らし始める。そのため密着していた乳肉同士が



さらにおつかりあい、姫騎士の美乳が弾き出されてしまった。

「はんっ……ふ、二人とも、そんなに胸を擦りつけないでっ……」

レイチエルは慌てて乳房を抱え直して再度ペニスを押し当てようとするが、美女たちの乳摩擦に巻き込まれてしまい上手くいかない。

「でもこうやって乳房同士をぶつけるようにしてペニスを扱って差し上げますと、テッド様はとっても喜んでくれますよ」

「そ、そうなのか……そんなに気持ちいいものなのか……」

自分たちの行為がどれだけ男を興奮させることかというのをいまいち理解していないレイチエルは困ったような表情を浮かべる。

しかしメイドの言う通り少年はペニスを乳房で扱かれ快感に悶えているのを見て、意を決したように見よう見真似で姫騎士も胸を揺らし始めた。

「んっ……はぁ、んっ……こ、こんな感じ？」

「ふふ、そうです……あぁんっ、その調子で胸を揺らしてください……」

サイズと弾力で勝るルーシアの爆乳に、絹のように肌触りがよく柔らかいミレイの巨乳に加えて、その両方を兼ね備えたレイチエルの美乳までいきり勃つ逸物を扱ってくる。

「あぁ、レイチエル様までっ……そ、そんなっ……」

異なる乳圧を同時に味わうという肉体的な快感もさることながら、本来なら話しかけることすらできなかつたはずの王国を代表する美女三人がおっぱいを弾ませパイズリをして

くれている光景がさらなる興奮を誘う。

むにゅん！ むにゅ、むちっ……にゅるん、むにゅんっ!!

亀頭から漏れる先汁と乳肌に滲む汗でぬめる乳肉が敏感なペニスを包み込むようにして擦り、極上の乳圧のおかげで射精欲は大きくなる一方だった。

「ふふ、坊やったら……アタシのおっぱいの中でビクビクってなってるわ……もう出そうなの？」

少年の限界が近づいていることを察したらしくルーシアが頬を上気させながらこちらを見つめてくる。強がる余裕もなくテッドは素直に頷いた。

「は、はい……もう、出そうですっ……」

今にも射精しそうだったが、もつとこの大迫力の乳奉仕を味わっていたくて下半身に力を込めて何とかギリギリのところで堪える。しかし三人分のおっぱいから与えられる快感は凄まじくて、湧き上がる衝動を上手くコントロールできない。

おかげでいつの間にか無意識のうちに腰が浮き上がり、自らペニスを乳肉に押しつけてしまっていた。柔らかい乳肌に竿が包み込まれ、さらに快感は高まる。

「あ、ふうん……テッド様、どうぞ我慢なさらずに……はあん！」

「そうよ、テッド……遠慮なんてしないでいいから、はあ、んはあ……好きな時に出していいんだからあ……」

「ほらほら、坊やのイクところをアタシに見せてちょうだいっ……」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

竹内けん

Takenti Ken presents harem series official guide

ハーレムシリーズ

公式ガイドブック

竹内けん特別インタビュー他、
「歴史年表」「人物相関図」
等々あの超人気シリーズの
世界観を網羅した
完全ガイドが登場!!

特別描き下ろし
イラストも多数収録!



Now On Sale!!

A5判/定価990円(税込)

特設サイトはこちらからアクセス!!

<http://ktcom.jp/harem/>

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ?



ドキドキラブな
ハーレム系ライトノベル!

二次元
ドリーム文庫

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう!
かなり過激なライトノベル!

二次元
ドリームノベルズ

サイズ:新書

※二次元ドリーム文庫は、全編の方向性をきまっています。

日常に密着したエロス、リアルな
舞台設定で送る官能小説レーベル!

リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラノベ!

あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCの
オフィシャルサイトにて!

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!



ヴァルキリー

<http://www.comic- Valkyrie.com/>

cranberry

<http://www.cran-berry.com/>

mille-feuille

<http://www.mille-feuille.jp/>

モバイル二次元ドリーム

<http://www.2d-dream.jp/>

KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!